



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2010/04/14(水)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 70

今年も高成績を収めた全国ジュニア・オールスター大会の総括を女子チームのヘッドコーチである小林 淳監督に寄稿していただきました。

都道府県対抗ジュニア・オールスター大会を終えて

女子ヘッドコーチ 小林 淳

<はじめに>

3/29東京の新宿ワシントンホテルにいる私の携帯に一本のメールが入りました。秀島ジュニア連盟理事長からのメールです。「長い間お疲れ様でした。」とベスト8を祝福していただいたコメントから始まるそのメールの最後に「なぜ北海道が最終的に勝てないのか？単独チームでも何が足りないのか？淳の目で感じたことを文にまとめてください」とありました。

また、北海道に帰ってから連絡が入り、「TACTICSに載せるから」という話を頂き、今筆をとっているところです。私のようなものが全道各地の優秀な指導者に感じたことを話してもと思いましたが、覚悟を決め、経験不足の私がこの大会にあたってどのようにチームを作ったか、全国大会でどのように戦ったか、全国との違いは何かなど思い切って純粋に感じたことを書いてみたいと思います。

<チーム結成当初>

1次合宿を終え、2次合宿を迎える前に、チームスタッフで今年度のチームづくりについてお酒を飲みながら(1/7)語り合いました。その時、私が「チームコンセプト(たたき台)」として文書に表したが以下の通りでした。

決戦大会や2次合宿を見ないとまだ何とも言えないが、身長の高い選手で得点を重ねることができる選手はいないと考える。また、能力の飛び抜けた絶対的なエースといえるポイントゲッターも不在である。しかし、運動量とスピードのある選手は豊富であり、戦術に忠実な経験豊かな選手も多い。よって、今年度は昨年度以上に激しいディフェンスから相手のミスを誘い、素早い攻めを強く意識させ、レイアップシュートによる得点の多いゲームに持ち込みたいと考える。ディフェンスについてはオールコートの2-2-1プレスを何種類か用意し、ハーフにおいてもゾーンによって相手のリズムを崩したい。理想としては12名全員が短い時間を全力でプレーし、交代を頻繁に行いながらゲームを支配したいと考える。2-2-1は相手のバックコートで激しくWチームにいくものとフロントコートまで運ばしてからWチームにいくものなどで使い分けていきたい。しかし、昨年度プレスは常時効いていたもののハーフのゾーンで簡単にボールを回されアウトサイドシュートを打たれすぎた感は否めない。よってやはりハーフにおいてマンツーマンは欠かせないものとする。…略…

また、ディフェンスリバウンドへの取り組み方が勝敗を左右すると言っても過言ではないので徹底して

全員でリバウンドにあたらせたい。オフェンス面ではインサイドを固定せず、センターがポップアウトしたり、ガードやフォワードにスクリーンをかけるなど仕事人に徹させ、能力のあるガード・フォワードにスペースを与えてきたい。また、おもいきりよくドライブのできるプレーヤーもいるのでドライブからの合わせやインサイドにボールを入れてからの合わせを徹底し、3Pを積極的に打たせていきたい。飛び込みリバウンドについても大きな武器としたい。

今、文書を書くにあたって、1月のこの自分の考えを振り返ると、うまくいったかどうかは別にして、だいたいこの通りの意図でチーム作りを進めることができたかなあとと思います。実際に運動量の豊富な走れる選手や、戦術に忠実な経験豊かな選手が12名に残り、こちらの意図したチーム作りができました。ただ、170cm以上の選手が一人もいないというものすごく小さなチームになってしまいました。後日12名の選手に指導をしていただいた秀島先生も「何年も道選を見てきているけど一番小さいな…」と言わせるほどでした。しかし、2-2-1ゾーンプレスについては、ファーストラインからサードラインまで非常に運動量が多く、反応も良く、コーチ陣が求める動きを瞬時に習得するので、昨年度以上の手応えを感じていました。

ただ、ハーフのマンツーマンディフェンスについてはスタッフで話し合った結果、短い練習期間と、相手のビッグマンへの対処方法を考え、思い切って基本的にはしないこととしました。ただ、今年チームの中心選手である神居東中や帯広第一中がマンツーマンディフェンスでしっかりと守ってきているだけあって、この決断は文に表せない大きな決断でした。すべての批判は自分が受けるという決意でハーフゾーンを徹底することにしました。

12名になって最初の練習はまず、プレスダウンから始まりました。どんなに能力のある選手を預かっても相手のプレスにはまる程後悔することはないと考えたからです。ただ、決められた動きを強要し、選手の能力を封じ込めることのないよう十分注意し、動き方の原則について時間をかけて指導しました。また、その日の後半には昨年同様秀島先生に来てもらいハーフのゾーンをご教授いただきました。次の日には創成高校に出向き、練習試合をしながらゾーンアタックの原則を教わることもできました。今年度も「選手にとって素晴らしい経験を！」という思いから、多くの優秀な指導者からいろいろなバスケットを学ばせることに何の躊躇もありませんでした。

<東日本選抜大会に参加して～東北地方と北海道>

今年度も例年通り東日本選抜大会に参加しました。仙台の地で「今年チームは全国の中学生にどれくらい通用するのだろうか」とワクワクして試合に臨みました。結果的に参加チームで最も小さかった北海道が5戦全勝で終えることができたのは子どもたちにとっても私たちスタッフにとっても「やっていることに間違いはない」という自信につながりました。東日本各県のチームスタッフは、ここ数年の北海道の実績から女子についても「スピードがあってシュート力のあるチーム」というイメージが強いことが話してわかりました。諸先輩方が築きあげてきた実績とジュニア連盟の協力体制などで東日本において北海道がリードし始めている印象を正直持ちました。

まず、チームとしてのまとまりで何歩もリードしているように思えました。これは北海道の指導者たちの道選チームへの理解と協力が何より大きいと感じます。また、多くの県が選手をあまり代えず能力のある5人で勝負にきているのに対し、北海道は12名全員がクォーター毎などに代わる代わる出場しチームプレーを行います。個々の選手の能力についても、北海道は背こそ小さいものの十分戦っていける力を持っていると感じました。

<本戦>

本戦では予選リーグ初戦の徳島戦を危なげなくしっかりと勝つことができました。相手のウォーミングアップを見ているとそれほど強いチームに見えませんでした。昨年度同じように感じた山梨県に苦戦した経験があったので決して油断することなく私も試合にのぞみました。「まずは、思い切りの良いドライブから始めよう」そう言って送り出すと選手はしっかりとそれに応え、佐々木さん（帯広一中）のドライブによる得点から怒濤のように攻め続けました。ゾーンプレスがおもしろいように決まり、初戦で全員得点できたことはチームに勢いと安心感を与えました。

2 試合目は滋賀県でした。ウォーミングアップ時に必死にハーフのゾーンアタックの練習をしている様子を見ると「相手は焦っているなあ」と思いました。インサイドの選手をしっかりとおさえることができればいけるのではと感じました。しかし、バスケットはやはり恐ろしいものです。打てども、打てども入らないミドルシュートや3P、しまいにはフリースローもほとんど入りません。小さなゾーンを引いてきた相手に何をやってもうまいかない時間が続きました。点が入らないのももちろん得意のゾーンプレスにももっていきません。

かなり厳しい時間が続きました。そんなときチームを救ったのが安田さん（北広島広葉中）の安定したプレーでした。相手をうまくいなしてトップからゴールに切れ込みファールを誘い、しっかりとフリースローを決め続けました。また、古屋さん（平岡緑中）のディフェンスを恐れないスピードに乗ったドライブによって、相手のディフェンスが壊れ始めました。そして何より感心したのは今年度のエースである坂野さん（神居東中）の精神力です。前半打てども、打てども3Pが入らず、それどころか3つのファールをしてしまいました。後半大事なところで出場すると、しっかりと3Pを決めてくるのです。前半のミスに気落ちなど全くしない精神力に「ああこれがエースというものだなあ」と感じました。本当に苦しい試合でしたが、ゾーンプレスのあたり方を少し工夫したことがズバリ的中し、後半の残り12分で40点をもぎとる爆発力を見せ、勝利することができました。

次の日、決勝トーナメント1回戦は茨城県でした。前日の最終試合をしっかりと見ることができた上にスタッフがビデオを撮ってくれていたので十分なスカウティングができました。ただ、明らかに能力の高い選手たちを見て、正直「厳しいなあ」と思いました。体のある力強いパワーフォワードの選手がいて、ゴールにねじ込む茨城でしたが、ただ、なぜか勝てないとは思いませんでした。それは外のシュートがほとんどないことがわかったからです。また、相手の2-1-2のハーフゾーンについても攻め方をしっかりとイメージできました。前日のミーティングで細かく指示したことを、しっかりと行ってくれるのが今年のチームです（これはやはり各選手のそれぞれの指導者がしっかりと質の高いバスケットボールを指導して下さっていることにつきますと思います）。

面白いようにゾーンアタックがうまくいき3Pが入り続けました。もちろん茨城はマンツーマンに変えてきましたがそこからが全国のチームです。しっかりとしたオールコートマンツーマンで16点も差があった1Qからあっという間に7点差まで縮められました。苦しい試合でしたが、三塚キャプテン（神居東中）のオフェンスリバウンドやここぞというときのスピードあふれる多田さん（帯広一中）の速攻、安田さんの落ち着いたボールコントロールで何とか逃げ切ることができ、ベスト8に駒を進めることができました。

ベスト4をかけた2回戦の相手は静岡県でした。1回戦の勝利の後からずっとビデオで相手の欠点を見抜こうと努力しましたが、落ち着いたハーフマンツーマンディフェンスから速攻、速攻がダメなら24秒をしっかりと使ってインサイドにしっかりとボールを集める、余裕を感じさせる攻めに「上手いなあ」という印象ばかりが残ってしまいました。それで

も全く歯が立たないことはないと言われ、ゾーンプレスで流れがこちらに流れればと試合にのぞみました。前半はある程度オフェンスにリズムがあり、1対1のドライブで得点を重ねることができました。しかし、後半、足が止まり始め、オフェンス時にボールも止まるようになってしまいました。相手にポイントを絞って守られはじめ、北海道のエースセンター（PF）の樋口さん（室蘭向陽中）も両足をつってしまうほど頑張りましたが、試合巧者の静岡県に大人のバスケットを見せつけられたような試合になってしまいました。

<全国上位チームとの差>

全国上位の都道府県と何が違うのか考えました。まず茨城戦で感じたのは、背はそれほどでなくても体のがっちりとしたパワーフォワードの選手にゴリゴリと体を寄せられ20点以上とられました。一昨年前の秋田にやられた時も同じタイプの選手にやられました。体の強さはやはり全国上位に劣るのかなあと思います。また、逆に静岡（常葉中など全国上位常連のいるチーム）のようなエネルギーを最小限に抑えながら、冷静にパスを回して、ペリメーターでのジャンプショットを確実に決めていくチームと対戦して、対外試合経験の差のような部分も感じました。

さらに、優勝した福岡県の選手の脚力を見ていると、北海道は、まだまだ及ばないと思いました。パス回しの速さ、選手の動きだしの速さに驚きました。やはり、北海道はドリブルが多いのだろうなあとも思いました。プレスダウンにしてもハーフオフェンスにおいてもまずドリブルをついてしまうことが多々ありました。そういった意味でベスト4に入っていたチームはどのチームもここぞという時にドリブルをとっという気になります。だからこそここぞという時のドライブが生きるのでしょうか。北海道がこれから全国で勝ち抜いていくためにも、より豊富な運動量と脚力が求められるのではないかと思います。ドリブルで打開するのではなく、選手の動きで打開するような豊富な運動量が養われれば、体の強さも自ずとついてくるのではないのでしょうか。

ただ、全国上位に比べて都道府県選抜レベルではものすごい差があって追いつけないところにいるわけではないと思います。現在の北海道バスケットボール協会や、ジュニアバスケットボール連盟の支えが今後とも続き、全国の多くのチームと試合ができれば、全国制覇の夢も、夢で終わらないのではないのでしょうか。

最後になりましたが、いつもヘッドコーチのやりたいことを瞬時に理解して下さり、的確にアドバイスと安心感を私に与え続けてくれた丸谷先生、熱い気持ちと細かい気配り、労を惜しまない行動力で私を支えてくれた石本先生、東京本戦で子どもの世話を完璧に行いながら、観たい試合も観られないでビデオをとってくれた瀬尾先生、慣れない強化委員の仕事を一生懸命行ってくれた山崎先生、協力して下さいました。ありがとうございます。

HBA（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会